



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1132

24.11.2024 (135)

A. V. Schaerffenberg

白人種の知られざる英雄たち

パート5

エオイン・オダフイ

第三帝国における白人の生存をかけた戦いは、20世紀における最大の功績であった。しかし、アイルランドにおける同じ闘いは、あまり記憶されていない。アイルランドの人々は、他のすべてのアーリア民族と同様に、我々の民族の血のつながった兄弟姉妹である。ユダヤ人は彼らと世界の他の異邦人を区別せず、そのような潜在的な犠牲者をすべて、「愚かな家畜」を意味する非ユダヤ人に対する卑しい侮蔑の言葉である「ゴイム」と見なす。そのため、アイルランド人は、アドルフ・ヒトラーという人種的救い主を見出した



Eoin O'Duffy

ドイツ人に劣らず、ユダヤ人の背信行為から免れることはできなかった。アイルランドの優秀な人々は、自分たちの土地が全人類を脅かす共通の脅威から救われる剣として、彼のイデオロギーに注目したのである。

現代のゲール語人種運動のルーツは、1920年代に外国の占領軍に部分的に勝利したアイルランド南部の共和制国家、アイルランド自由国の混乱と失望から生まれた。しかし、その結果生まれたダブリン国家は、すべての民主主義国家に典型的に見られる汚職と集団的無責任に満ちていた。アイルランドの愛国者たちの犠牲は、リベラル派と保守派のいがみ合いと接待の間で浪費され、世界的な不況のど真ん中で絶望的な苦しみを味わった。政治的スキャンダルと経済的惨状という民主主義の魔女の酒から、マルクス主義の悪臭が初めてアイルランドに漂った。以前はナショナリストで英雄的だったアイルランド共和国軍は、この自由民主主義の非合法的な子孫に感染し、あからさまにボリシェヴィキ的な革命的労働者党は、ハンマーと鎌で汚された赤い布切れを悲しいダブリンの通りに吊るした。

アイルランド解放のための1916年と1920年代の蜂起の帰還兵たちは、共産主義者のギャングに殴られたり、ヒステリックなマルクス主義者の暴徒に怒鳴り倒されたりした。彼らは公然と、小さなアイルランドを自分たちの腐敗した世界革命のための足がかりに過ぎないと考えていた。他のすべてのヨーロッパ諸国で展開された国家転覆と同じパターンが、イギリス諸島にも広がり、国際ユダヤ人の同じ暴徒によって実行されていた。退役軍人たちは、自己防衛のために陸軍同志会で団結した。現代アイルランドの近代史家コステロは、それをこう表現している：「この国では、国民の権利と自由を守ろうとする自然発生的な運動が起こった。国民の権利と自由を守ろうとする自然発生的な運動がこの国に起こった。A.C.A.が自然発生的に生まれたのは、国民の権利を守る義務を負う政府が、その義務を怠っていたからであり、国のいたるところで起こっているフリーガン行為を見過ごすことが自分たちの利益になると考えていたからである」。

共産主義者の反発は激しかったが、自由主義当局は左翼ウイルスに困惑し、アイルランド自由国家を実現させた彼らに何の助けも与えなかった。そこで自暴自棄になったA.C.A.メンバーは、新たに勝利を収めたドイツのストームトルーパーを自衛の手本とし、1933年4月8日、ダブリンで青シャツ運動が誕生した。アドルフ・ヒトラーの茶色のシャツを着たS.A.を模範

としたアイルランドの隊員たちは、A.C.A.の中で最も若く（精神的にも肉体的にも）急進的な要素を代表していた。反共産主義者の言論の自由は即座に回復され、愛国者が赤の凶悪犯の犠牲になる代わりに、マルクス主義者は突然、殴打の血まみれの末端に身を置くことになった。青は、国全体を取り囲む青い海に象徴されるように、統一アイルランドを象徴する色として選ばれた。

ブルーシャツがリーダーを選ぶ

6月、ブルーシャツ党は満場一致でエオイン・オダフィを党首に選んだ。彼は政府で最後の誠実な男であり、賄賂を贈ることができなかつたために彼を憎んだ民主政治家たちによる解任は、全国的なスキャンダルを引き起こした。41歳で、がっしりとした白髪のおダフィは、国家警察長官であり、民間警備隊の将軍でもあった。オダフィは強力で非常に独立した警察長官だった。彼は宣伝の才能があり、1920年代にはたびたび新聞の見出しを飾っていた。彼は全国的に非常に有名だった。彼は全国陸上競技・自転車協会の主要メンバーであり、1932年のオリンピックでは大成功を収めたアイルランド・チームの監督を務めた。独立戦争では派手な指揮官として成功を収め、マイケル・コリンズ将軍（反乱を指揮）の側近として参謀本部副長官を務めた。1922年に警察長官に任命され、1924年の反乱後の一時期は陸軍参謀総長の地位にあった。その結果、彼は非常に広く知られるようになり、かなりの独立勢力の立場にあったようだ。”

ブルーシャツ就任当時、オダフィはアイルランドで最も有名な人物だった。「彼は精力的で有能な組織者として評判だった」。オダフィの「はったりで気さくな人柄は、デ・ヴァレラに匹敵する人物」となった。1933年7月20日、ダブリンのハイバーマンホテルで開かれたA.C.A.の会議で、オダフィは満場一致で組織のトップに選出された。

オダフィはすぐに、ブルーシャツを新しく創設された州兵の右腕に変身させた。その宣言された目的は、「国益と社会文化」を守り、「あらゆる階級的区別を消し去る」ことであつた。アイルランドの統一を促進すること。共産主義に反対し、国政における外国人の支配と影響に反対するこ

と。アイルランドの若者を建設的な国民行動運動に導き、社会秩序を促進・維持する。司法裁判の助けを借りて、ストライキやロックアウトを効果的に防止し、全会一致で労使紛争を解決する、雇用者と被雇用者の調整された全国組織の形成を促進する。マニングが書いているように、「この見出しで除外されるのはユダヤ人だけである」。オ・ダフィーは、「ヒトラーはドイツ史上最も偉大な人物である」と宣言し、アイルランドの青シャツも総統の茶シャツのように、共通のユダヤ人敵に対して「民族の精神で反撃する」と約束した。

オダフィーのダイナミックなリーダーシップと青シャツ・イデオロギーの組み合わせは、国民に受け入れられる爆発的な人気をもたらした。マニングはこう書いている。「この新しい運動の影響は即座に、そして劇的に現れた。数カ月も経たないうちに、この運動は州内のあらゆる場所にメンバーと支部を持つようになった。このような運動はかつてなかった」。オダフィーの任命からわずか3日後、ブルーシャツの会員数は新たに5,000人急増した。しかし、国家警備隊は、その目的を説明した発表記事の中で、クラブ活動家や運動に真剣に取り組んでいない人々を思いとどまらせるために、わざわざこう述べている：「国家警備隊は説得ではなく戦闘に頼っている。州兵は説得ではなく戦闘に頼る。州兵は戦闘のために組織されており、もし牢獄で備えの光景が攻撃を怯ませるのであれば、戦闘から身を引かない隊員を求めている」。しかし、アイルランド国民の中で最も優秀でタフな要素に対するこのような訴えは、聞き入れられることはなかった。「この種の記事と並行して、青いシャツの着用が広まり、やがて全国各地で見られるようになった」とマニングは書いている。

農民、工場労働者、学生、そしてもちろん退役軍人など、アイルランド人の人間的基盤を構成する人々からの支持が大きかった。また、アイルランドの偉大な思想家たちが州兵から取り残されることもなかった。コークのユニバーシティ・カレッジの歴史学教授であるジェームス・ホーガンや、ダブリンのユニバーシティ・カレッジの学長であるマイケル・ティアニー教授が初期の支持者であった。「イエーツ（ウィリアム・バトラー・イエーツ、偉大で有名な詩人）は、根っからの右派であったが、彼（オダフィー）に非常に好感を持ち、ブルーシャツのために行進曲を書いた」。民主主義の腐敗に嫌気がさし、マルクス主義の脅威に怒った彼らは、1933年

末までに30,000人の青シャツが集まるほど大勢で国家警備隊に参加した。翌年末までに、オダフィの支持者は12万人を超えた。これは、アイルランドのような規模の国では、真の大衆運動であった。

ダブリンへの行進

1934年8月13日、最大規模のデモが行われた。その時すでに、アイルランド全土で何千人もの人々が州兵の集会に参加していた。しかし、ダブリンへの行進には、2万人を下らないブルーシャツが全国から集まった。しかし、彼らの目的は当局に異議を唱えることではなく、独立戦争で戦死した退役軍人のための式典を開くことだった。行進はまだ出発したばかりで、すでに半マイル以上にも及んでいた。「ムッソリーニがイル・ドゥーチェになったことに気づいていなかった政府は、オダフィが政府の建物の近くまで来ると、長居をするのではないかと考えた。そこで政府は、1931年に公安法を復活させた。S師団（機関銃と手榴弾で武装した警察）が設置され、軍事法廷が復活し、パレードが禁止された」。

オダフィーの平和的意図は明らかだったが、彼のデモは、リベラル派と保守派の政治家が運動を非合法化するために必要な口実となった。彼は単に「ヤング・アイルランド」と名前を変えただけで、ほとんどすぐに禁止されたが、同じようにすぐに「青年同盟」として再浮上した。最終的に、この運動を法廷で解体しようとする体制側の努力を経て、統一アイルランド党（ファイン・ゲール）が誕生した。このタイトルは、1923年にパリで開催されたアイルランド人種条約に由来する。民主化政府がオダフィーの支持者を犯罪者にしようと画策する中、このような名称の変更の間、すべての青シャツ組織は維持された。デ・ヴァレラはアイルランドの元老院

(Dail) に対し、「我々は人々が軍服を着てパレードすることを許可しない。それは間違いない。そのような段階に至った場合、危険な段階に至ったと判断し、政府が介入する義務がある。政府はそれを阻止するため、あらゆる力を行使する。」

オダフィーの発言は、それに対する強い反論だった：「我々は合法的な組織だ。私たちが着ている服は合法的なものです。ダブリンに共産党本部が

2つもあり、全国でさまざまな共産主義活動が行われるのを容認している一方で、あらゆる活動が全面的に調査され、あらゆる目的が誠実で善良である団体を禁止するほど、政敵への憎悪に目がくらんだ政府があり得るとは、ほとんど信じられないことだ。青〇シャツに違法性はなく、いかなる禁止令や条例も、青〇シャツを着用することを違法とすることはできない！」。

政府がファインガエルを追放しようとする偽善的な試みを行ったにもかかわらず、ファインガエルはほとんど一夜にしてアイルランドで2番目に大きな政治組織に急成長した。アイルランドに希望を与えたひとつの運動を犯罪の対象として取り上げるといふ、体制側の明白かつヒステリックな努力は、民衆の感情に意図的な変化をもたらした。青シャツの理想に完全に賛同しない、そうでなければ誠実な人々でさえ、デ・ヴァレラの自明の専制政治に愕然とした。マニングは、「実際、この党の結成は、そしてその結成の仕方、政府が国民衛兵を禁止する決定を下したことに負うところが大きかった」と書いている。オダフィーは弱体化するどころか、今や統一野党の党首として台頭し、彼の運動は潰されるどころか、今やはるかに大きな組織の一部として新たな強化された地位を得たからである」と書いている。

ファイン・ゲールの候補者が合法的にデイルに選出されている間、リベラルと保守の政治家たちは、共産主義者の凶悪犯との「根本的な違い」を脇に置き、ブルーシャツに対抗する共通の大義を築いた。ファイン・ゲール党員が自宅から拉致され、I.R.A.の赤軍に撲殺されたちょうどその時、警察は挑発することなく、ダブリンの統一アイルランド党本部ビルを襲撃し、閉鎖した。最初の青シャツ殉教者であるヒュー・オライリーは、ムッソリーニのローマ進軍18周年にあたる10月29日に死亡した。翌年の夏、S警察は非武装の青シャツに発砲し、18歳の同志を殺害した。マニングは「群衆に発砲した特別警察の行動は、後に高等法院のハンナ判事によって厳しく非難され、彼は彼らを『その立派な組織 (The Civic Guard) の逸物』と評した」と書いている。ヨークでの銃乱射事件は、国中に多大な青シャツへの憤りを呼び起こした。死者の若さ、事件全体の劇的な性質、警察の過剰で恣意的な対応、これらすべてが相まって、青シャツ派の怒りは新たなレベルにまで高まった。市とオダフィーの墓前での演説は、青シャ

ツが抵抗を強めるための感情的な叫びの要素をすべて備えていた。

トラリーのU.I.P.集会で勃発した非常に激しい戦闘では、爆弾が爆発し、車が炎上し、オダフィ自身もハンマーを振り回す赤によってひどい傷を負った。しかし、青シャツ党は、I.R.A.内外のマルクス主義者たちを打ち負かし、当然のように消滅へと向かっていった。ファイン・ゲールがアイルランドの大衆の間で人気を博していることの表れは、国政選挙において、最初の上院議員選挙で2位を獲得したことにあつた。1935年を通して、体制と共産主義者が彼らに投げかけるあらゆるものにもかかわらず、ブルーシャツは成功から成功へと行進し、その進歩はアイルランド国外でも注目され始めた。8月19日、オダフィはノルウェー・ファシズムの指導者テリエ・バルスルードの訪問を受け、12月15日には、青シャツ関係者がイタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、オーストリア、ベルギー、オランダ、デンマーク、ノルウェー、リトアニア、ギリシャ、ルーマニア、スイスの同志とともに、スイスのモントローで開催された国際ファシスト会議にアイルランド代表として出席した。マニングは、オダフィが「国際ファシスト会議の労働委員会に選出されたことを大きな名誉だと考えていた」と書いている。

ブルーシャツ禁止令

国内外での名声が高まり、オダフィと彼の支持者たちはアイルランドで究極の権力を手にする運命にあるように思われた。しかし、ウェストポートでの野外集会で、青シャツ運動は突然終わりを告げた。マニングが語っているように、「警察の二重の封鎖線がプラットホームを取り囲み、戦争装備の軍用車2台が警察兵舎の外に駐屯していた。警察の他のグループは、青いシャツを着ていた人たちをすべて追い返した。オダフィ不在の間、主な演説者はフィッツジェラルドで、彼は60人以上の（青シャツ）騎馬隊の行列の先頭で壇上に近づいた。集会が始まって30分ほどして、オダフィは群衆の端に滑り込んだが、そこですぐに警官隊に囲まれた。乱闘の後、オダフィは支持者たちに助けられ、肩の高さまで壇上に担ぎ上げられ、そこで演説を始めた。彼は最初の一言を言い終わらないうちに警視総監に逮捕され、警視総監は彼を追ってホームに上がった。大勢の警官隊に

取り囲まれたオダフィーは警察兵舎に連行され、厳重な警備の下に収容された。その間、集会は大混乱の中で続けられた。壇上には瓶や石の雨あられが降り注ぎ、耳をつんざくような騒音の中で、残された発言者の声は聞こえなかった。集会が終わる前に、オダフィーの著名な支持者2人が青いシャツを着ていたために逮捕され、彼らのリーダーとともに拘留された。

ウェストポート警察の暴動は、アイルランドにおける言論の自由の殺人だった。デ・ヴァレラによるファイン・ゲールの犯罪化が実現したのだ。青シャツであるというだけで法律違反であり、どのような形であれ、青シャツの意見を表明しようとする者は逮捕された。このような容赦ない専制政治の重い手の下で、文字通り何千人ものU.I.P.幹部や支持者、組織とは無関係の同調者までもが身柄を拘束された。これらの信奉者に対する非難は、軽いものではなかった。オダフィーの副官だったネッド・クロニン司令官は、扇動罪で起訴された。数ヶ月の収監の後、彼は無罪となったが、今度は「非合法組織のメンバー」として再び起訴された。判事は、もしクロニンがブルーシャツを公に糾弾すれば、彼に対するすべての告発を取り下げると告げた。迷うことなく、司令官は投獄を選んだ。オダフィーは数々のとんでもない罪状で拘束されたが、そのどれもが、どんなに執念深い検事であっても、納得のいくものではなかった。しかし、釈放されてみると、連合アイルランド党は事実上解体され、その指導者たちはいまだに刑務所に収監されたままであり、彼らの法的地位は「犯罪組織のメンバー」に引き下げられ、その組織と結託することは投獄の対象になっていた。民主主義の仮面をかぶった専制政治は完全に露呈したが、運動はもはや公的現象として存続することはできず、その信奉者たちは地下テロリストとなることでI.R.A.の真犯人に従うことを拒否した。

「スペインに行った

ブルーシャツの物語はウェストポートの逮捕で終わったかもしれないが、1936年7月、フランシスコ・フランコ将軍の代理人がダブリンでオダフィーと密会した。フランコは、スペイン内戦で共産主義者と戦うために、ファイン・ゲールの指導者が同志を集めることに興味があるかどうかを知りたがった。オダフィーはこのチャンスに飛びついた。政府を無視し、彼は公に

支援を呼びかけ、アイルランド義勇旅団を結成した。「その反応は非常に迅速で、寛大で、自然発生的なものであった。一週間も経たないうちに、彼の指揮下には5,000人の兵士が集まった。翌週には、さらに1000人が合流した。というのも、カトリック・アイルランドの世論はスペインにおける国民党の大義を圧倒的に支持しており、反青シャツ派の政治家でさえ、オダフの努力を公に批判することを恐れていたからである。

オダフィは9月21日にスペインに出航し、国民党軍の総司令官モラ将軍とフランコ本人に面会した。フランコはオダフィとともに、共和国軍の包囲に長い間耐えてきた英雄的要塞アルカサルの解放を直接目撃した。こうして刺激を受けたオダフィは、訓練、物資、軍服、武器、スペインの戦場に青写真を運ぶ船を自由に使えるようにするというフランコの個人的な保証を得てアイルランドに戻った。一方、ダブリン政府は「外国人入隊法」を可決し、アイルランド義勇旅団を非合法化した。それでもオダフィは計画通りに進めたが、秘密裏に活動するという苦難が加わった。しかし、アイルランドの共産主義者たちがスペイン共和国軍に参加するためにリクルートされていることを知ると、オダフィに対する民主主義当局の圧力は和らいだ。政府は、オダフィ将軍とその愉快的仲間たちに対して外国人入隊法を発動することはないだろう。スペインがアイルランドのドン・キホーテに最もふさわしい場所であることを、おそらく理解しているからだ。スペイン内戦は、少なくとも有用な目的を果たしただろう。

スペイン軍によるわずか1ヶ月の訓練の後、彼らはチェンボズエロスの前線に送られ、敵の砲火と厳しい冬の状況にさらされながら、数ヶ月に及ぶ苦しい塹壕戦に従事した。しかし、3月13日、志願兵たちは「頂点を越えて」攻勢に転じ、マルクス主義者たちを動揺させた。しかし、I.V.B.の死傷者も多かった。スペインでの作戦は、ブルーシャツの最後のあがきだった。自国では非合法となった彼らは、旧敵国との決別を果たし、アイルランドの自己犠牲の血でイベリア半島の大地を神聖化した。オダフィが書いているように、「私たちの小さな部隊は、スペイン内戦で目立った活躍はできなかったが、世界共産主義との戦いで祖国を代表することを確実にした。我々は批判され、嘲笑され、中傷されてきたが、真実、慈愛、正義が勝つだろうし、時が我々の動機を正当化するだろう。我々は賞賛を求めない。我々は義務を果たしたのだ。我々はスペインに行ったのだ！」

最後の青シャツ

旅団が帰国したとき、第二次世界大戦は数カ月後に迫っており、アイルランドの公式中立の立場は、青シャツ隊の弾圧をより容易で効果的なものにしていった。今や、運動のために行われるあらゆる活動は、必然的に秘密裏に行われることになった。1939年2月3日、オダフィはドイツの諜報員オスカー・ファウスから連絡を受けた。彼は、アイルランドの宿敵であるイギリスと戦争になった場合、第三帝国にシンパシーを持つアイルランドのメンバーと接触したいと考えていた。オダフィーは、パファウスとI.R.A.に残っていた数少ないクロズド・ナショナリストとの仲介役となった。この交渉は秘密裏に行われたため、その成否については事実上何も残っていない。しかし、1944年、大西洋中部でUボートがイギリス海軍に撃沈されたとき、戦時中のドイツとアイルランドの関係を示す奇妙な手がかりが浮かび上がった。漂流していた残骸の中に、I.R.A.の将校の遺体があった。

同年、オダフィーは健康を害し、生涯をレースへのダイナミックな奉仕の末、11月30日に亡くなった。享年52歳だった。ブルーシャツは9年ほど前に組織としては消滅していたが、彼の死はアイルランド国民に大きな衝撃を与えた。民衆の感情は非常に広範かつ激しく、政府は彼に国葬という最後の榮譽を与えるよう圧力を感じた。そのため、「世界をファシズムから救う」という人種差別的な自殺戦争のさなか、何千人もの人々が青シャツ指導者の遺体の前を通り過ぎ、右腕をヒトラー式敬礼で伸ばし、エオイン・オダフィへの最後の賛辞を述べた。アイルランドの皮肉に満ちた彼の葬儀は、故将軍の古い仲間たちに、彼らが30年代に戦ったイデオロギーの抑えがたい力を印象づけた。

青シャツ派が目指した国民統合と社会的調和は、彼らの終焉後の数十年間、アイルランドにもたらされることはなかった。この50年間、アイルランドの人々は、南北間の亀裂が自国の傷を悪化させるのを目の当たりにしてきた。ベルファストという恐怖の地からは、血の海が流れ続けている。恐怖と深い敵意が、ブルーシャツ追放の遺産を構成している。I.R.A.のテロリストたちは殺戮と殺傷の限りを尽くし、リベラルと保守の

政治家たちは相変わらず口先だけだ。一方、かけがえのない白人たちは、子供たちの未来に絶望している。

ブルーシャツはすでにこの世を去って久しいが、決して忘れ去られたわけではない。彼らの血とエネルギーは、アイルランドの風景に、そしてそれと同じくらい深く、アイルランドの人種意識に影響を与えた。オダフィとその軍団は、アイルランドの歴史の一部であるだけでなく、アドルフ・ヒトラーによって始められ、今日まで受け継がれてきた国際的な白人の復活運動という大きな絵の中に属している。しかし、彼らの旗印が新しい手によって過去の塵から再び掲げられる時が近づいている。そのとき、アイルランドは長い年月の死を乗り越えて、再び生き返るだろう。歴史の亡霊が生まれ変わり、ブルーシャツの歌声が響き渡るだろう。



NS KAMPFRUF
KAMPFSCHRIFT DER NATIONALSOZIALISTISCHEN DEUTSCHEN ARBEITERPARTEI AUSLANDS- UND AUFRÜHRUNGSORGANISATION

Der Kampf geht weiter !

Siebzehn Jahre nach der Kapitulation der Wehrmacht am 8. Mai 1945 ist die antisemitische Bewegung wieder da. Sie zielt auf den Nachkriegszeit. Und zwar nicht nur in Deutschland, sondern auf globaler Ebene!

„Menschen von Massenterror, Verurteilung, Verhaftung und Verurteilung haben nicht umgebracht, das kann der gesamte Meinungs- und Informationsbereich Adolf Hitler zu danken sein.“

Alle Nationalsozialisten und sonstige arbeitsfähige Völker- und Rassenbewegungen sollen sich an der Erhaltung unserer weißen Völker. Die Bewegung ist zwar wieder geworden, aber die Größe des biologischen Völkertums ist heute noch viel größer als in der Vergangenheit.

Ein neuerlicher Gegenstand ist oben, aber der Völkertum - gegen alle weißen Völker () zu kämpfen, keine Mittel und Einrichtungen, Überlebendigkeit und Rassenbewegung.

Ob „legal“ oder „illegal“, ob im Wahlkampf oder im Brautwerbung, ob mit Propagandaarbeit, bewacht oder auf einem Schiffsfeld oder auf der Nationalsozialisten bei seiner Pflicht!

Hail Hitler!
Gerdhard Lauth



TROTZ VERBOT NICHT TOT!



N.S.ニュース速報A
www.nsdapao.org
#1005 19.04.2022 (133)
NSDAP/AO: PO Box 6414 - Lincoln NE 68506 - USA

フロントレポート
モリーへのインタビュー
第3部

NSK: 現在のプロジェクトは、明らかに哲学的で、アートに関連したものです。

このような話題が政治に与える影響について、あなたの考えをお聞かせください。

モリーです。フォトギャラリーの更新は続けていますが、主にAdolf Hitler and the Army of Mankind (www.mourningtheancient.com/truth.htm)に集中して取り組んでいます。現在21ページですが、まだまだやるべきことがたくさんあります。第二次世界大戦の物語は、まさに情報の地雷原です。1つのことについて情報を控えても、さらに2つほど調べたいことが出てくる。まるで、埋も



the **NEW ORDER**

Number 176 (APR) Founded 1979 April 26, 2022 (133)

The Fight Goes On !

Seventy years after the capitulation of the Wehrmacht on May 8, 1945, the postwar National Socialist movement is stronger than ever not only in Germany, but throughout Europe.

Decades of mass murder, expulsion, persecution, and defamation have not sufficed to destroy the seed of the brilliant idea of our much loved Führer Adolf Hitler.

All National Socialists and other racially-aware conservatives and racial kinemen fight side by side for the preservation of our White folk.

The movement has indeed become stronger, but the danger of biological folk death is also much greater today than in the past.

The desperate enemy is in the process of committing genocide against all White folk. His means are non-White immigration, culture denigration, and race-mixing.

Whether "legal" or "illegal", whether in election battle or street battle, whether armed with propaganda material or on a battlefield of a different kind every National Socialist must do his duty!

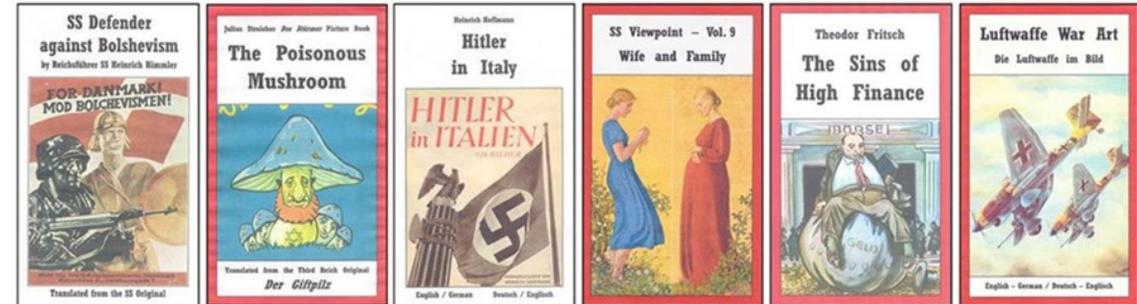
Hail Hitler!
Gerdhard Lauth



TROTZ VERBOT NICHT TOT!

NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物
多くの言語の何百冊もの本
多くの言語の何百ものウェブサイト



BOOKS - Translated from the Third Reich Originals!
www.third-reich-books.com



NSDAP/AO
Fight Back!



nsdapao.org
Contact us to find out how YOU can help!